

## 中国の人口問題再考——ひとりっ子政策のその後——

伊藤 えりか

一九四九年に五億四〇〇〇万人だった中国の人口は、一九九五年に二億二人に達し、二〇〇五年一月には二億三人を超えた。二〇〇五年以降、人口増加は七〇〇万人以内に減り、その増加数は年々減少している。今後、二〇三三年頃にピークを迎え、約一五億人に達すると予測されている。

人口超大国である中国では、人口問題は建国以来、国の将来を論じるうえで避けて通れない課題だった。建国間もない一九五〇年代後半には、急速な人口増加を予見した中国人人口学者が人口を抑制する必要性を提言している。過剰な人口が経済発展の足かせになるとの認識から、中国では一九七九年に「夫婦一組に子供は一人」を提唱する人口抑制策（通称「一人っ子政策」）が取られるようになった。世界でも前例のないこの政策は当初、「世紀の大実験」とも呼ばれた。現在では「小康（まずまずの生活水準）社会」を目指す中国で人口急増を抑制し、中国経済の発展に大きく貢献したとの評価を得ている。

しかし、実施から三〇年以上を経た今、人口抑制策に起因するひずみも生じている。出生率の低下による

労働人口の減少、急速な人口高齢化、より男児を望む傾向による出生性比のアンバランス、一人っ子世帯の増加による高齢者扶養問題など。人口は環境、資源エネルギー、食糧問題とも密接な関係にある。中国は人口規模が大きいだけに、その経済的・社会的影響は計り知れない。

中国人口学会や複数の人口学者は、人口動態統計と新たな社会問題を検討し、将来人口減少に歯止めがからなくなるとの懸念を抱いた。二〇〇四年から人口抑制策を緩和すべきだという意見書を出している。その一方、現行の人口政策を維持し、経済成長を優先させることを重要視する見解もある。中国は人口政策再考の時期を迎えているのだ。一人っ子政策以降の中国の人口問題を幅広く取り上げて解説する日本語資料を紹介したい。

一九七〇年から中国の人口問題研究に携わってきた若林敬子氏による著作は欠かせない。『中国の人口問題と社会的現実』（ミネルヴァ書房二〇〇五年）は、人口社会学の視点から中国の人口問題に関わるテーマを取り上げ、統計データを交えて分析、解説している。

第一線で活躍する中国人研究者の

生の論者を紹介する目的で訳された学術書が複数ある。田雪原著『大國の難——二一世紀中国は人口問題を克服できるか』（新耀社 二〇〇〇年）は中国で著名な人口経済学者の著作の日本語訳だ。中国が直面する人口問題を、経済学・社会学の視野に立つて解説している。中国が自国の抱える人口問題をどのように捉え、対処しようとしているかを知るうえで参考になる。

若林敬子編著『中国人口問題のいま——中国人研究者の視点から』（ミネルヴァ書房 二〇〇六年）も中国を代表する人口・社会学の専門家四名による邦訳論文集だ。人口政策、人口動態といった人口学の面だけでなく、都市化・移動と社会階層、高齢化、少数民族など、問題が山積する労働・社会学の面からも論じられている。中国社会を内側からみつめる研究者が、問題を掘り下げている。

田雪原・王国強編『中国人口学会著『中国の資源——豊かさを持続可能性への挑戦』（法政大学出版 二〇〇八年）は、中国人口学会が二〇〇三年に行った研究報告を法政大学大学院エイジング総合研究所が訳したものだ。三〇名余の著名な中国人研究者が人口・労働経済学、開発経済学、環境、医療、都市経済学、年金、財政学、国際経済学などの切り口から、中国社会の将来を見据えて論じている。

人口問題研究を支える日本語資料集もある。若林敬子・轟海松編著『中国人口問題の年譜と統計——一九四九—二〇一二年』（御茶の水書房 二〇一二年）には、若林氏の長年の研究活動による資料・情報が集大成されている。一九四九年以来の人口政策・人口動態の動向に関する詳細な年表、統計、関連用語の解説、関連法令からなる。若林敬子編『ドキュメント中国の人口管理』（亜紀書房 一九九二年）は関連する法律・条例・通達などの一次資料の邦訳が収録されている。出版は少々古いが、複雑な行政区分ごとの人口政策や戸籍制度を理解するうえで助けになる。

ここに紹介した資料には、先にあげたほかにも、かねてより予測された事象や新たな問題の発生が指摘されている。労働人口の需給バランス、都市化の影響、人口移動による問題、戸籍制度、高齢化による影響、年金制度改革、少数民族の人口事情、資源問題、環境への影響、都市部・農村部間の格差是正の必要性などである。市場経済の原理を導入して日の浅い中国は、特に年金や医療保険に代表される社会保障分野でかつての体制が崩れ、新たな制度の構築の途上にある。

人口政策をめぐる中国の模索はしばらく続くであろう。

（いとう えりか／アジア経済研究所 図書館）